



Title	危機方言保存の試み：方言認識に向けたカリキュラム「ノース・カロライナの声」を例にとって
Author(s)	上田, 功
Citation	大阪大学英米研究. 2014, 38, p. 31-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

危機方言保存の試み

方言認識に向けたカリキュラム

「ノース・カロライナの声」を例にとって

上田 功

1 はじめに

言語学研究者の間で、「危機言語」の記録と保存が叫ばれるようになって久しいが、最近では方言においても消滅可能性が認識され、「危機方言」という言葉が、よく聞かれるようになってきた。我が国において特に知られているのは、国立国語研究所の共同プロジェクトである「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」であり、報告書として、これまで八丈、宮古、喜界島の3方言が公開されており、これらはウェブページからダウンロードすることができる (<http://www.ninjal.ac.jp/endangered/report/>)。また同プロジェクトは、これまで11回の研究報告会を開催しており、諸方言の現状に関して、数々の興味深い論考が発表されている。

これらの発表を含めて、危機方言の研究は、主としてその記述（と分析）が多く、その保存に関して具体的に論じた提案は少ないと言える。これにはいくつかの理由が考えられる。ここで前提として「言語」と「方言」の間に、ごく常識的な線引きをすると、まず言語の消滅は、それを使用する国家や民族の帰属意識や文化的、精神的支柱の喪失を意味し、大きな問題となるが、ある方言の使用者がいなくなっても、その使用者は別の方言を話すようになるのが普通であり、言語そのものは保たれることになる。また方言に愛着をもつ使用者がいても、他の方言を使用することに対する拒否感、嫌悪感は、他の言語に対するそれよりはるかに小さく、言語消滅ほど大きなアイデンテ

ィティーの消失とはならない。要するに消滅に対する危機感に大きな差があると言える。次に方言の保存は、その方言の音韻、文法、語彙、そしてその言語的文化遺産を適切に記述・記録して初めて可能になる。危機方言の研究すべてがバランス良くなされてきたとは考えられない。そして方言の保存は、それを日常に使用できるネイティブスピーカーを残して初めて成功したと言えるであろう。それには何らかの方法で、教育現場との連携が必要となる。現在義務教育では、学習指導要領の縛りがきつく、たとえ方言の保存を何らかの形で教育に組み込んでも、これに割ける時間はわずかであり、組織的な教材と教育方法が求められる。これまで啓蒙的な仕事としては、山浦玄嗣の一連の労作などの例があるが（山浦 1986、2000）、対象は大人である場合が多く、興味のある者だけが読むという形になっており、読者を積極的に方言の使用に巻き込もうという性格のものではない。誰を、どこで、どのように啓蒙するかによって、アプローチが異なるのは当然である。

さて筆者は危機方言が「文字通り」生き続けるのを願っている。すなわち、言語学研究者が膨大な時間と労力をかけて、危機方言の研究をおこなったものの、結局最後には、方言の辞書や語彙集、文法書、当該地域の昔話の朗読等の音声資料だけが残し、実際に方言を話す話者は残らなかったという事態は避けたいと望んでるのである。それではどうやって生身の人間に方言に目を向けさせて、それを使おうとさせるのか？その方法を、アメリカ合衆国ノース・カロライナ州オクラコークの方言教育カリキュラムの事例を参考にして考えていくのが本稿の目的である。

2. カリキュラムの概要

オクラコーク方言保存を目的としたカリキュラムは「ノース・カロライナの人々の声」と銘打ったプロジェクトの一環である。これは、著名な言語学者であり、アメリカ言語学会の会長も務めた、Walt Wolframが中心となって、専門であるアメリカ方言に関する長年の研究成果を基盤にして、子供に方言に対する正しい認識をもたせる目的で、ノース・カロライナ州立大学におい

て進められてきたプロジェクトである。これは公立学校において、授業として組み込まれていることと、すでに20年以上も続けられていること、そして全米で初めての州あげての事業であることが大きな特徴である。このカリキュラムは、言語学の知識を持たない教師に、いかに適切に方言を教授させるかにも力点がおかれている。

カリキュラムでは、2005年にまとまった形で、生徒向けの冊子と教師用マニュアル、そしてビデオや音声等の付属オーディオ・ビジュアル教材が完成し、2007年には改訂版がでているが、本稿では、2004年に「試用版」として発表された生徒向けのテキストである、*Dialects and the Ocracoke Brogue*を考察対象とする。その理由は、本稿の目的が危機方言の保存を論ずることであり、試用版が危機方言とされる一方言を対象としていること、そして改訂版では、方言の理解や認識からさらに進んで、州内で使用されている先住アメリカインディアンの言語や黒人英語、さらにスペイン語なども対象とするようになり、目的がいわば異文化理解や多文化共生へと拡大しているからである。

このプロジェクトは、ノース・カロライナ州立大学の言語学科のスタッフによる共同事業といってよいが、*Dialects and the Ocracoke Brogue*は、上記のWalt WolframがJeffrey Reaser（Duke大学の英語学博士学位取得希望者）の助けを借りて作成している。表紙には、タイトルと著者名に加えて、Ocracoke School Experimental Editionとあるので、広く州内で使用する前に、オクラコーク地方の学校で、試験的に使用したバージョンであると考えられる。

さて、本テキストの内容に入る前に、Ocracoke（以下では、オクラコークと仮名書きすることもある）地方とその方言に関して、説明しておく必要がある。

3. オクラコーク方言

ノース・カロライナ州中部大西洋岸の沖に、ちょうど屏風のように海岸線に沿って南北に伸びる細長い島々があり、これは文字通りアウター・バンクス（Outer Banks）と呼ばれている。オクラコークは、これを形成する島の

一つで、アウター・バンクスの南に位置する。ノース・カロライナ州はアメリカ南部に位置するので、地域方言としては南部方言の一部をなすことになる。南部方言を分類するのは容易ではないが、Pederson (2001) は、いわゆるアメリカ南部英語 (Southern American English) と呼ばれてきたものの全体を、大きく南部 (Southern) と中南部 (South Midland) に大別し、前者をさらに3つ、後者を2つの地域に分け、さらにこれらを18に下位区分している。¹⁾

Pederson (2001) の分類では、オクラコークはCoastal (Atlantic) に分類される。

²⁾ これはよく引用される Carver (1987) の区分では、Upper Atlantic South に属することになる。しかしながらオクラコーク方言はいわゆる孤立方言であり、本土方言とは異なった独特の体系をもつ。歴史的には、大西洋上の島であり、本土との交流が少なく、言語接触を受けなかったために、独特の体系を保持していると考えられているが、最近では交通機関やコミュニケーションの手段の発達により、様々な面で本土との交流が進み、オクラコーク方言は危機方言の研究対象と位置づけられるに至っている (Wolfram 2003)。「ノース・カロライナの人々の声」は、このような危機方言を保存しようというプロジェクトである。³⁾

4. テキストの内容

4.1. 序章

テキストの冒頭にはイントロがある。これは生徒ではなく、教師もしくは一般に向けた本教材の紹介であると言える。最初にはカリキュラムの目的が次のように記されている。

「本カリキュラムの目的は第8年生に「方言」の概念と、方言の言語や社会における重要性をよく知ってもらうことにある。本カリキュラムでは、諸方言と比較しつつ、特にオクラコーク方言に焦点を当てる。」

続いて各章の概略が述べられ、本テキストや併用教材の使用方法、そし

てクラスでの学習方法が説明されている。そして本カリキュラムが「ノース・カロライナの言語と生活プロジェクト」(North Carolina Language and Life Project)の支援を受けており、その目的が、1. 州の住民の異なった文化の伝統を反映した言語変種の豊かな遺産を守ること 2. 州内の言語の違いと変化に関する情報を、公共の教育的興味のために提供すること 3. プロジェクトのために集められた資料を、州全体の言語と文化に関する教育的プログラムの向上のために役立てること 4. 言語変種の性格や、言語がどのように変化するかを理解するために、言語変種に関する基本的で研究に資する情報を集めること、以上の4点であることが記されている。さらに発展的な目標として、生徒を科学的、文化的、歴史的に方言を見るレベルまで引き上げることが書かれている。すなわち、言語事実やデータについて考えることで、言語や方言の体系性を発見するという科学的視点、そして言語に対する歴史的文化的な影響を知り、方言の正しい認識を持つという文化的で歴史的な視点をもつことを掲げている。そしてこの両者が相俟って、言語変化や変種に対する偏見が無くなり、結果的にことばや文化の違いに対する認識や感受性が高まることを期待している。

4.2. 第1章 方言の位置づけ

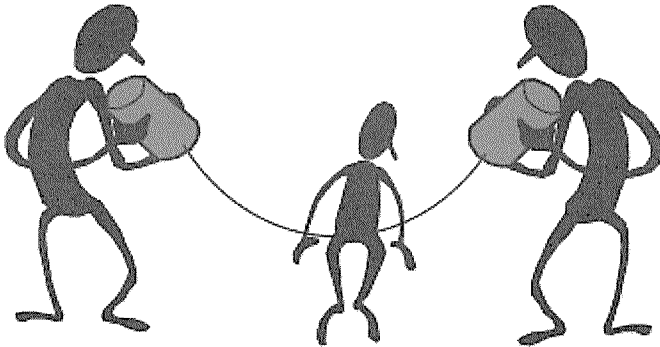
第1章は生徒に対して、本テキストの目的や、前提となる知識を教える章である。まず最初は方言の説明である。人々の異なった話し方から、「訛り」へと導入し、さらに訛りに対する人々の態度にも言及し、本テキストの目的が紹介される。次に用語の解説がある。「方言音声」、「訛り」、「方言語彙」、「レキシコン」、「方言文法」がいくつかの例と共に、平易な言葉で説明される。さらに「オクラコーク弁」の「弁」を指すbrogueがアイルランド英語に言及しつつ説明される。また用語の最後には「バイアス」があり、「人々はしばしば特定の方言に偏見をもっている。」との記述が解説のなかに書かれている。続いてビデオクリップを見ておこなうエクササイズがあり、次の5点にわたって生徒に答えさせるようになっている。

1. 方言とは何ですか。
2. 人は方言をどう考えていますか。詳しく書くこと。
3. 人の方言に対する感じ方は公平ですか。説明しなさい。
4. あなたは方言をどう考えていますか。
5. ビデオの諸方言をオクラコーク方言と比べ、少なくともひとつずつ相違点と類似点を見つけなさい。

本章は全体的な目的と基本用語の解説にあてられた、文字通りの序章ではあるが、「バイアス」がことさらに用語に含まれていることから、人々の方言に対する（しばしばネガティブな）見方を気づかせる役目も果たしている。これは、「方言には、目立つ方言とそうでない方言があるが、すべての人間が方言を話している」と強調した一文があることから明らかである。

そしてエクササイズの後には、自分で考えて書かせるジャーナル・セクションがあるのがアメリカ的で興味深い。方言に関する体験はあるか、強い訛りをもつ者に対して人はどんな先入観をもっているか、自分が訛りに基づいて人を判断したことはないか、等の例を挙げて、方言について書かせるわけである。そして最後に、「オクラコーク方言の範囲」と題して、この方言が画一的ではなく、発音、語彙、文法ともに、使用には個人差があることが説明されている。かつての隔絶された共同体から、本土との交流が進み、世代やアイデンティティーの違いによって、どの程度方言を使うかには個人差があり、方言は、訛りから訛り無しまで、中間段階をもつ「連続体」として考えるべきであり、さらにこの差は、社会言語学的なスタイルによっても異なってくる事が書かれている。この部分は、記述がやや専門的でもあり、発展的なセクションと考えてもよからう。この内容をさらに考えさせる4つの問いかけがさらに続く。自分の回りで強いオクラコーク訛りで話すのは誰か、さほど強くはない訛りで話すものがいるか、そしてその年齢や性別を考えさせたり、自分がオクラコーク訛りを場面や相手に応じて「調節」していないかを考えさせたり、さらに訛りの連続体の中に自分の知っている4人の人間

を配置させたりする問いかけである。方言やその使用の可変性や動的側面を考えさせようとする意図をくみ取ることができる。以上が第1章であるが、本章は、方言自体、その使用状態、方言に対する姿勢等、生徒がこれまで意識しなかった点をうまく浮き彫りにしていると考えられる。また次のようなイラストを随所に挿入して、教材をより親しみやすいものにしている。



4.3. 第2章 方言の層

第2章は、方言が音声、文法、意味が層をなして成り立っていることを解説している。まず音声面では、母音に後続する“r”の発音の有無などを例に挙げ、方言間の音声的違いに目を向けさせ、オクラコーク方言での、“high tide”の発音の個人差〔hoi toid〕か〔hai taid〕かに話を進めている。続いて文法を「文や語を配置する（方言に）個別の方法」と定義して、西部ペンシルベニアやオハイオ地方の、“The car needs washed”と標準的な“The car needs washing”を例示した後、“It wasn’t me”が、オクラコーク方言では、“It weren’t me”となることを指摘し、これが「方言文法」とであると説明する。そして語彙では、「同じものを指すときに、方言によって異なる語を使う」という説明の後、サブマリン・サンドウィッチ（“sub”）が、方言によって、“grinder”, “torpedo”, “hero”, “poor boy”等様々な呼び方をすると例示し、雄鹿や1ドルを意味する“buck”が、オクラコーク方言では「親しい友人」となることを

示している。また逆に「同じ語が方言間で異なった意味を持つ」例として、“soda”を挙げ、オクラコーク方言では“scud”が、「乗り物に乗る」意味で使われている事実を目を向けさせている。

この説明が理解できているかを試す練習が続き、10組のペアの文が、音声、文法、語彙のどの点で異なっているかを指摘させる。次に3つ例を挙げる。

1. That feller sure was tall./ That fellow sure was tall.
2. She needed a rubberband./ She needed a gumband.
3. They usually be doing their homework./ They usually do their homework.

このように方言の3つの要素に対する理解の定着を計ろうとする理由は、子供が分析的に言語について考えたことがないので、基礎をできるだけ固めようとする意図が感じられる。

次にオーディオ・エクササイズが配置されているが、ここでは、オクラコーク方言と類似点が多くもつ、同州西端で話されるアパラチア方言の民話を聴く。一度通して聴いた後、民話中から同方言の特徴的な文や句が10個選び出され、それらが音声、文法、語彙のどの点で特徴的なのかを答えさせている。ここでも方言の3要素にこだわり、別の方言を取り上げることで、客観的に考えさせようとする意図が感じられる。またこの段階で民話の音読に接することによって、教材に文化的な広がりをもたせている。

本章の中心をなすとも言えるのが、次のセクション「オクラコークの語彙」である。始めに語彙の多様性を説き、“token”(「形見」)、“mommuck”(「困らせる」)、“quamish”(「むかむかと(胃の)気分が悪い」)のように何世紀も遡ることができる語彙や、“dingbatter”(「島外者」)、“up the beach”(「島の北の方へ」)など、比較的新しい語彙があることを紹介している。また興味深いのは、“call the mail over”のように知識に基づく推論を働かせる以外には、起源がわからないものもあるということを言っている。ちなみに“call the mail over”は「郵便を配達する」という意味であるが、これは本土から郵便が舟で運ばれてき

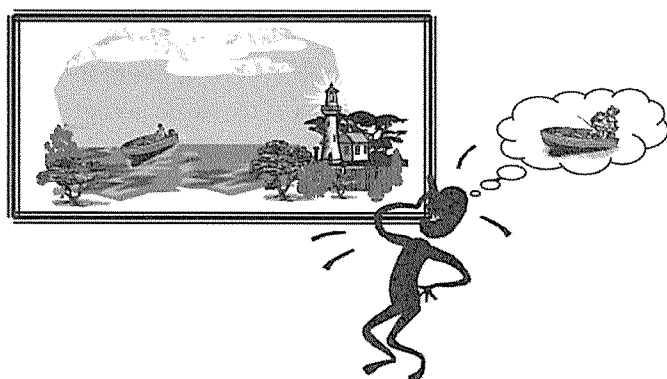
て、波止場で受取人の名前を大声で呼んだという島の習慣に由来すると考えられている。そしてその後にオクラコーク方言に特徴的な語彙のサンプルリストがあり、17の語や句が、それぞれ、見出し語、品詞、語義の説明、例文の順に掲げられている。次に2例を挙げる。

buck n.	A friend, usually a male friend. <i>He's a real buck.</i>
miserable'n	Agitated, feeling very uneasy or unsettled. Very bad.
the wind adj.	A shortened version of the phrase miserable than the wind. <i>Rudy is miserable'n the wind when he's on this week off from the ferry; The day was miserable'n the wind.</i>

次に方言語彙に関する作業をさせるエクササイズが続く。10個の語もしくは句について、自分が知っていたか、周囲のいろいろな年代の人に訊いてみよう、などに加えて、自分で方言語彙を含んだ文を作らせる作業が入っていることが目を引く。方言を使用させる試みである。

章は、「ボキャブラリー・ゲーム」で締めくくられる。最初に20個の語・句をリストアップし、20の文の空所を補充させる、よくあるタイプの問題であるが、解答時間を5分に制限し、自分ひとりで解いた後、クラスメートと用紙を交換し、答合わせをして、点を書き込むというプロセスにしたことで、文字通りゲーム感覚で作業ができるよう工夫がなされている。点数を以下のようなスケールに書き込んで、「オクラコーク人度」を計るようになっている。

O'COCKER 20 -----15-----10-----5----DINGBATTER



生徒は本章で、語彙に関して、オクラコーク方言のおおよその姿を把握することになる。

4.4 第3章 方言の規則

この章では、言語や方言は「パターン」をもつことが説明される。最初に言語の構造は規則性をもっていることが、限定形容詞と名詞の語順を例にあげて説明がなされ、英語では形容詞プラス名詞の順、スペイン語では名詞プラス形容詞の順であるが、各言語には定まった規則性があることが述べられる。そしてこの規則は、子供の時に無意識のうちに獲得され、人が話す時に自動的に働くことが、無意味形容詞の例によって説明される。さらにこの原理が方言音声や文法にあてはまり、方言の規則性を見抜くことは言語学者のように考えることであり、言語学者の仕事は科学者が自然の法則を記述するように、人の頭に存在するこの規則性を解明することであると述べている。

もちろん平易なことばで書かれてはいるが、言語学では身近な“predictable”や“regular”等の用語が繰り返し使われているのが目を引く。これは4.1で述べたように、方言の姿を観察することで、科学的にものを考えさせるという発展的目標を意識したものであろうが、これは日本の教室での方言教育では、おそらく扱われていないもののひとつであろう。

次にオクラコークを含むいくつかの方言での規則性を論じていくが、最初は方言音声における“r”の脱落である。始めに母音の後の“r”を含む7個の語と、頭子音位置にある“r”を含む7語の2つのグループを見せて、どちらのグループの語の“r”が発音されないかを考えさせる。さらに両者を混ぜたリストを示し、“r”の発音の有無を問うている。あくまでも帰納的なアプローチを取り、自分で規則性を発見させようとしている点が参考になる。“r”音脱落はさらに進み、いわゆる“linking r”に話は及ぶ。同じ様に母音が後続する7例が示され、子音が後続する7例と比較することによって、この現象が起こる音韻環境を考えさせる。さらに“r”の脱落が起こるケースを選ばせる練習と、次のような文を、“r”をしかるべきところで脱落させて、実際に読ませる練習が続く。オクラコーク方言では、母音に後続する“r”は発音されるので、この練習は難しいかもしれない。

1. The teacher picked on the three students for an answer.
2. Four cars parked far away from the fair.

続いて、南部方言の母音に触れる。最初は“tin”と“ten”のペアのように鼻音の前で、[ɪ]と[e]の対立が失われる例が、“lit”と“let”のような非鼻音の音韻環境の例と比較して説明される。

次のセクションでは、特徴的な方言文法が解説される。最初は複数形の接尾辞“s”である。オクラコーク方言では、多くの南部方言に見られるように、「重量」と「長さ」を意味する名詞は複数形の“s”が省かれる。ただしこれ

は何らかの数量表現と共起する場合のみ許される。次の例で1と2は許されるが3は非文である（Wolfram and Schilling-Estes 1997）。

1. Three hundred pound of flounder
2. It's three mile up the road.
3. *Yesterday I drove mile and mile.

テキストでは最初に“s”なしで現れる1、2のような例を示し、それを必ず“s”がつかねばならない例と比較させ、分布について一般化させる。例えば次のような例が含まれている。

1. two hundred pound of flounder / two hundred cats
2. how many bushel / how many dogs
3. lots of gallon of water / lots of ponies

さらに数量表現と共起していない重量や長さの名詞の例を示し、上で述べた一般化に至るように工夫されている。この後に練習問題が続く。⁴⁾

次に諸方言に散見される、“ing”に付く接頭辞“a”が取り上げられる。最初にこの“a”はすべての“ing”形に付属できるものではないことを、いくつかのペアで比較して考える。次に3例を挙げる。

1. Building is hard work. / She was building a house.
2. He likes hunting. / He went hunting.
3. The child was charming the adults. /
The child was very charming.

ここで判断にあたっては、「直感」、「内省」することを求めている。Wolfram and Schilling-Estes（1997）によると、オクラコーク方言では、“a”接辞は衰退

してきているので、すべての生徒にとって日常卑近な項目ではないそうであるが、この現象に規則性がある以上、内省が働くと期待してのことである。事実、“a”接辞のない方言話者でも、どちらがすわりのいい文であるかは、一目瞭然である。ここで“a”接辞の分布は、品詞が問題になり、名詞や形容詞ではなく、動詞として機能する“ing”だけに接続するという事実が導かれる。“a”接辞は、さらに音韻環境にも左右される。語幹の第一音節に強勢をもつ語にのみ添加されることを、やはりいくつかのペアの比較により学習する。最後に復習の練習問題が置かれている。

文法の最後の項目はかなり応用的側面が強い。生徒は黒人英語の“be”がどのような場合に使われるかを、ここでも次のようなペアを比較して考えさせる。

1. They usually be tired when they come home. / They be tired right now.
2. My ankle be broken from the fall. / Sometimes my ears be itching.

黒人英語では連結詞としての“be”は、習慣的に起こることを表す場合以外は省略されるが、生徒は次にビデオを見て、この規則を確認する。この黒人英語への言及は、次のオクラコーク方言の“be”動詞のめずらしい活用に進むための導入であろうと考えられる。オクラコーク方言では、“be”動詞の過去の否定形は、すべての人称と数で、“weren’t”になる。これを筆者らは、活用の「規則化」(regularization)と呼び、方言によっては、不規則的な“be”動詞の活用を、一般動詞の過去形のように、すべて同じ形にする力が働くとして、過去の肯定形をすべて“was”にする例を示しながら解説している。また共通の過去否定形である“weren’t”が、アメリカの方言ではめずらしいが、多くのアウトター・バンクスに入植した住民の出身地である南西イングランド地方でも見られることにも触れている。

本章の最後には、Focus Questionが3問あり、できるだけ詳しく答えることが求められている。最初は、黒人英語の諸方言は予測可能な規則に従って

いるかを問い、2番目は、オクラコーク島では見られるが、学校で学ぶ英語にはない、規則性のある言語現象を挙げさせ、3番目では人は自分の方言の規則的なパターンをどのように学習するかを問うている。本章では、音声と文法に焦点が当てられたが、これらを学ぶためには、言語の規則性に言及することを避けては通れない。章の最初で、言語の本質的な特徴を巧みに説明し、ここでも言語事象を観察させて、帰納的に規則性を導き出させるという方法が功を奏している。

4.5 第4章 オクラコーク英語の歴史

本章はオクラコーク方言に特徴的な文法と音声のまとめから始まる。他にも入れるべきものがあるかもしれない、限定的なリストではあるが、と断つてから、まず文法項目を例文と共にリストアップしている。リストにはこれ以前の章で触れられたものもあるし、新出のものもある。文法項目は次の通りである。

1. 人称・数共通過去否定の weren't
2. 位置を示す “at” の代わりに “to” を使う
3. 重量・長さの名詞の複数形に “s” をつけない
4. “ing” に添加される “a” 接頭辞
5. 集合名詞の文法上の単数扱い (People goes to Norfolk a lot.)
6. 二重法助動詞 (Kenny might could come to school.)
7. 不規則動詞の過去形の不変化 (Yesterday he come to the store.)
8. 不規則動詞活用の規則化 (Last year he grewed some vegetables.)
9. -some を添加した強調 (That pie was good-some.)

音声に関する項目としては10項目が挙げられている。もちろん発音記号は使用せず、スペリングでわかるように書かれている。

1. “tide” “time” の長い “i”: “toide”, “toime”
2. “sound” や “round” の “ou”: “saind”, “raind”
3. “it” や “ain’t” につく “h”: “hit”, “hain’t”
4. “r” の前の “a”: “thar” (there), “war” (where)
5. “s” の後の語末の “t”: “oncet” (once), “twicet” (twice)
6. “ow” の代わりにの語末の “er”: “feller” (fellow), “goanner” (guano)
7. “i” の代わりにの “ee”: “feesh” (fish), “reeb” (rib)
8. “a” の代わりにの語末の “y”: “extry” (extra), “sody” (soda)
9. “ire” の代わりにの “ar”: “far” (fire), “tar” (tire)
10. 最初の “w” の消失: “young’uns” (young ones), “second’un” (second one)

次にオーディオ・テープで3人の話者の発話を聴いて、これらの項目を確認を確認する。

本章の中心は簡潔にまとめられたオクラコーク英語の歴史的変遷である。この要点を記すると、次のようになる。

「オクラコークに人が定住したのは、1700年代半ばに遡る。最初の入植者が話していた英語は今の英語とかなり異なっていた。言語は変化するものであるからである。もし同じ言語を話している人々が2つのグループに分かれ、互いに隔絶すると、その言語は異なった変化をとげる。だからひとつの言語が複数の方言に変化するのである。入植当時、イギリス英語にも異なる方言があり、オクラコーク方言に目立った特徴を共有するものとして、イングランド南西部と南東部の方言がある。オクラコーク方言の特徴には、ノース・カロライナ本土とは異なったものがあり、特にオクラコークではシェイクスピアの時代まで遡るような古い語彙を始め、他にも古い文法や発音を残している。オクラコーク英語に影響を与えたのは、アイルランド英語であるが、特に北部ベルファストのスコットランド系アイルランド人が南部、特にアパラチア山脈に移民している。オクラコーク方言は地理的に遠く離れたアパラチア方言と文法や発音で非常に類似した特徴を多く共有している。この事実

は、スコットランド系アイルランド人がアウター・バンクスの言語にも影響を与えたことを物語っている。またオクラコークは他の南部英語とは異なり、黒人英語に影響されたことがない。

オクラコークはその地理的な孤立ゆえに、1800年中期までにはノース・カロライナ本土の英語とかなり異なっていたが、それは南北戦争でノース・カロライナ本土が南軍に属し、一方アウター・バンクスの住民は北軍に与したことで、交流が途絶え、方言差は一層拡大し、さらに大恐慌に至って、住民は北部に職を求めたので、この隔絶は1930年代まで続いた。

第二次大戦後は、本土とのフェリーの定期運行の開始、島が国立公園に指定されたことによる観光客の増加、そして島内の道路の整備等が、本土との交流を促進し、状況は大きく変わる。その結果、今日ではオクラコーク方言は廃れつつある。しかしながら誇りを持って方言を使用する若年層がおり、オクラコーク方言は、変化しながらも、保持されている。」

この歴史の記述には1ページの地図が付属している。地図にはアメリカ北東海岸と英国が描かれ、オクラコークまでの入植者達の経路と複数の出発地及びその地域で特徴的であった発音や文法が記入されている。最後にオクラコーク方言の現状を描いたビデオをみて答えるエクササイズがあるが、内容を問う質問の最後に、あなたはオクラコーク方言が消滅しつつあると思うか、これを保存すべきであると考えてるか、その理由は何かを書かせる質問があり、本教材が核心に近づいてきたことをうかがわせる。さらに英語そのものの歴史を、「主の祈り」の冒頭の行を古期英語、中期英語、初期近代英語、現代英語と辿ることで、言語変化に対する意識を深めている。

この章は英語の歴史的変化の中に、オクラコーク方言を位置づけている。一般的に、生徒は自分の話す方言を、地域の歴史に関連づけて俯瞰した経験がない。この章はまさにプロジェクトの発展的な目的のひとつである歴史的文化的な視点から方言を考察し、生徒に方言を守るべき歴史的文化的遺産であることを教えていると言えよう。

4.6 第5章 オクラコーク英語と他の方言

最終章ではオクラコーク方言が、(言語的に) 独立して存在し得ないものであることを、様々な特徴を他の方言と比較しながら解説する。比較対象は、他のアウター・バンクス方言、アパラチアを含む高地南部方言、南部諸方言、そして南部以外の方言である。これまで説明された語彙、文法、音声が、それぞれ5項目ずつ、これらの方言と表を用いて比較対照され、類似か相違かが示される。これにより、総じてオクラコーク方言は他のアウター・バンクス方言と共通点が多いこと、語彙ではアパラチアを含む他の南部方言と同じものが多いことがわかる。文法においてもアウター・バンクス方言とアパラチア方言と同じである点が多い。しかしながら、発音ではオクラコーク方言はアウター・バンクス方言と共通点はあるものの、他の方言からかなり異なっていることがわかる。ここで地理的には大きく離れているオクラコークとアパラチア両方言の間に類似点が非常に多いことが明らかになるが、その理由として、ペンシルベニアやヴァージニアに上陸した入植民の南下ルートのひとつが、アパラチア山麓沿いであり、また別のルートが南東海岸沿いであり、しかも入植地が孤絶した深い山間にあつたり、本土から離れた島であつたりして、言語接触がなかったことが原因となり、同じように古い形を保ったことが解説されている。付属している方言地図には、ノース・カロライナの方言が色分けされ、州の西端のアパラチア方言と東端のアウター・バンクス方言が同じ色に塗られ、類似していることが示され、両者の間に介在する東側の海岸平原方言がやや類似点有り、そして西側の高地方言は異なった特徴をもつことが示されている。

これを受けて、次に方言の比較が、オーディオ・エクササイズとして課されている。比較対象は類似しているアパラチア方言であり、年配の女性によって、「アパラチアの幽霊の話」が朗読され、それを聴いて、オクラコーク方言の特徴との類似点と相違点を指摘させようとするものである。最後の練習問題では、オクラコーク島の南に位置し、同じように隔絶した歴史を持つ、ハーカーズ島の住民が語るビデオを見て、類似点や相違点を指摘させたり、

若年層の方言の消失の度合いをオクラコークのそれと比較したりさせている。この後には、自分の意見や気がついたことを何でも記録するため、白紙の「ジャーナル」 ページが4 ページ付属し、最終ページにはオクラコークの美しい海岸や港の写真を配して本教材は終わっている。最終章は方言間の関係や、言語的特徴の類似と相違、およびその歴史的原因を説明することによって、自分の方言の相対化を計っているものと考えられる。

5. おわりに

本稿では危機方言を、記述だけではなく、話者を残すという実質的な形で保存したいという観点から、ノース・カロライナの学校教育における先駆的な取り組みを紹介し、方言保存に向けたカリキュラムと、その中心を成すテキスト教材を検討した。これにより方言教育の鍵として浮き彫りになったのは次の諸点である。

1. 方言に対する偏見を払拭し、方言に関する正しい認識をもつ。
2. 方言の諸相を言語学的、すなわち科学的に捉える。
3. 方言を歴史的文化的遺産として認識する。
4. 方言を他の方言や共通語との関係において相対化して捉える。
5. ことばそのものに対する感受性を培う。

言語や方言は先人の残したかけがえのない遺産であり、いったん消滅すると、その損失は計り知れない。もちろんどの言語、どの方言を使用するかは、個人の基本的な人権に属する問題であることは言を俟たないが、上記5点を考えると、言語学研究者には、記述以外にもまだできることがあると考えられる。また実質的な効果を望むならば、学校教育に組み込むことを現実的に考えねばならない。関係各局との協働が望まれる所以である。

(注)

- 1) 方言は重層的である。特にアメリカ合衆国の場合、地域方言に加えて、社会・人種方言があり、また言語の性差も、方言のコンテキストで論じられることがある。またニューヨークやシカゴ、デトロイトのような大都市では、移民のコミュニティーごとに異なった変種が観察されることは周知の事実である。またこれらの方言が複雑に影響し合って、住民の言語使用を形作っている場合も多い。さらに世代間の差も考慮すべき点である。ノース・カロライナにおいても、例えば Wolfram (1996) は、Lumbee インディアン¹の英語は、コミュニティーの言語接触による文化的違いが複雑な言語形式を形成していると報告している。

なお Pederson (2001) による南部方言の分類は次のようである。

Southern

Coastal (Atlantic, Gulf)

Interior (Piedmont, Gulf Plains [eastern, central, western])

Delta (upper [Arkansas River basin, Yazoo River basin, Red River basin], lower [Atchafalaya River basin, Lower Mississippi River basin])

South Midland

highlands

eastern: Virginia, Kentucky, east Tennessee, Georgia Blue Ridge

central : middle Tennessee, upper Alabama Cumberlands

western: Missouri and Arkansas Ozarks

piney woods

Georgia and Alabama wire grass

Florida and Alabama sand hills and pine flats

Mississippi and Louisiana piney woods

East Texas pine flats

- 2) Ocracoke は、先住民のアルゴンキン語の “waxihikami” (囲まれた場所、要塞) が誤った文字化をされ、それが英語流に “Wococon” と発音されるようになり、最終的に “Ocracoke” とされている (Wolfram and Schilling-Estes 1997)。
- 3) Wolfram and Schilling-Estes (1998) によると、オクラコークの北にあるチェサピーク湾の島々や南に位置するサウス・カロライナやジョージアの諸島も同じ危機に直面しているという。後者は黒人英語でもアフリカ諸言語に由来する要素を保っているガラ方言 (Gullah) が話されている。
- 4) 本文には注釈があり、このような複数接尾辞の脱落は方言の特徴であり、英米の様々

危機方言保存の試み——方言認識に向けたカリキュラム「ノース・カロライナの声」を例にとって

な方言にみられ、特にアパラチアやオザーク、そして北部アイルランドや英国北部にも見られると付記されている。

(謝辞)

本稿の考察対象である教材を俎上に上げて議論した、2008年度の大阪大学言語文化研究科「英米言語文化論」受講生のコメントと、試作版「岩手方言保存」のアイディアに感謝します。またこのように多角的に言語を見ることを教えていただいた杉本孝司先生にもお礼を申し上げます。

(引用文献)

- Carver, Craig M. (1987) *American Regional Dialects. A Word Geography*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Pederson, Lee (2001) Dialects. in Algeo, John (ed.) *The Cambridge History of the English Language*, vol. 6: English in North America. Cambridge University Press.
- Schilling-Estes, Natalie and Wolfram, Walt (1999) Alternative models of dialect death: dissipation vs. concentration. *Language* 75: 486-521.
- Wolfram, Walt (1996) Delineation and description in dialectology: The case of perfective I'm in Lumbee English. *American Speech* 71: 5-26.
- Wolfram, Walt (2003) Enclave dialect communities in the south. In Nagle, Stephen J. and Sanders, Sara, L. (eds.) *English in the Southern United States*. Cambridge University Press.
- Wolfram, Walt and Schilling-Estes, Natalie (1995) Moribund dialects and the engendered canon: the case of the Ocracoke brogue. *Language* 71: 696-721.
- Wolfram, Walt and Schilling-Estes, Natalie (1997) *Hoi Toide on the Outer Banks*. The University of North Carolina Press.
- 山浦玄嗣 (1986) 『ケセン語入門』共和印刷企画センター
- 山浦玄嗣 (2000) 『ケセン語大辞典』無明舎出版